

『青森県史 資料編 近世5 南部2 八戸藩領』

岩淵 令治

本書は、青森県史の近世の資料編としては五冊目の刊行で、前回の『青森県史 資料編 近世3 津軽2 後期津軽領』から五年ぶりとなる。東日本大震災をはさんでの刊行は、なみなみならぬご苦労があったかと思う。ただでさえ、自治体史の資料編の刊行が困難になってきている中で、貴重な史料の数々を翻刻し、世に出してくださった関係者のみなさんに敬意を表すとともに、心より感謝したい。

さて、同書は以下の構成からなっている。

第一章 八戸藩の成立と幕藩関係

第一節 八戸藩の成立

第二節 幕藩関係の展開

第二章 藩政の展開と地域社会

第一節 八戸藩領の村落

第二節 農民支配の展開と元禄飢饉

第三節 藩財政の構造

第三章 地方知行制下の藩士と百姓

第一節 藩政前期の知行所支配

第二節 藩政前期の藩士開発新田と検地

第三節 藩政中後期の知行所支配

第四章 八戸城下の構造と城下商業の展開

第一節 八戸城下の構造

第二節 城下商業の形成と展開

第五章 産業の発達

第一節 漁業

第二節 鉄産業

第三節 馬産・牛産

第四節 製塩業

第六章 交通の発達

第一節 海上交通

第二節 陸上交通

第七章 信仰と宗教

第一節 宗教政策と寺社領の支配

第二節 民衆と宗教

第三節 神社の祭祀

第八章 後期藩政の動向

第一節 宝暦以後の藩政

第二節 文政改革

第三節 改革後の藩政

第四節 海防問題と北方問題

付図 1 天保陸奥国南部領絵図 2 奥州八戸御城下絵図

第一章では、八戸藩の分立と初期藩政の動向が取り上げられる。とくに、幕府・盛岡藩との関係も含めた八戸藩の成立過程、初代藩主直房の死、綱吉政権下で側衆にとりたてられた二代藩主直政にとくにスポット

が当てられている。解説にもあるように、県外の史料を博搜し、盛岡藩のほか、幕府側の史料（「柳営日記記」など）も所載している点が特徴であろう。側衆をつとめた際の日記が、御用商人の西町屋の文書に収められているのも興味深い。藩政の成立の項には、初期の重要な家臣二人を取りあげ、特色を出している。ただし八戸南部家の系図や幕府への役の概要が示された史料は、近刊の『新編八戸市史』でも未掲載であり、本書でも藩主の系図がしおりに示されるにとどまっている。第八章の家格問題なども考えれば、たとえ既刊の『寛政重修諸家譜』であっても、藩主の「家」の歴史が概観できる史料も掲載すべきだったのではないか。

第二章は、農村構造や農村支配の展開、藩財政や飛地の志和領の支配に関する史料が収載されている。南部藩領や八戸藩領については、村政にかかわるいわゆる地方文書が残存していないと聞く。前期に中心をおくとしながら、後期の史料もかなり含まれるが、史料制約を考えればやむをえないだろう。こうした中で、村明細帳の代わりに巡見使への報告を掲載して一次史料から村の概況を示すなど、史料選定の工夫がうがえる。また、盛岡藩領・南部藩領の農政において、年貢関係証文が藩から村ではなく個別の家に直接発給されたことは注目される。口絵写真で初期のものを全点掲載されたのも貴重である。藩財政の史料も断片的であるが、藩の日記から抽出した農村法令、農政と併せて掲載すること、藩政と村を一体化して示すことに成功している。No.二四七の志和代官の業務日誌は飛地領支配の史料として興味深い。ただし、藩士の統制の史料が本章に入っているのが気になった（No.一七一、No.一七六、No.一七七）。たとえばNo.一七一は武家の城下町集住を考える上で重要な史料で

あり、第四章の解説でも引用されている（ただし史料番号は付されていない）ことも考えると、第四章もしくは第八章に収録した方がよいようにも思えた。

第三章は、八戸藩の構造で重要である地方知行制を新田開発と併せてとりあげている。No.二八八は年貢・諸役や年中行事、知行主から村役人への振る舞い（晩飯）など、知行所支配の概要が把握できる興味深い史料である。また、八戸藩の検地方法と検見法を具体的に示したNo.二八六は、地域史のみならず、検地の史料として貴重である。

第四章は、城下町八戸の構造と商業をとりあげる。藩の町奉行や町の町役人の史料が残存していないが、御用商人の文書より、個別町の人口や職種、借家、一年分の町触を示し、町の状況を示している。また、商業については、民衆の生活にかかわる木綿（とくに上方からの古手の仕入）と、城下で大きな財力を誇った酒に絞って、史料を掲載している。酒仲間の動向がわかる「永歳目安録」（No.三〇〇）は興味深い。紙幅の関係で、「御触状」（No.二九九）や、御用商人の覚書である「永代書留伝」（No.二九六・二九七）が一部略されたのはやや残念であった。

第五章は、農産物以外の代表的な物産として、漁業・製鉄・馬・塩の史料をとりあげる。鉄山経営が御用商人の引継ぎの史料によって示されるなど、いずれの史料も興味深かったが、馬産・牛産について牧など特産品や御用馬としての馬とともに、農業生産にかかわる牛馬の史料がともに収載されているのが気になった。村の人別と牛馬の改め（No.三八四）などは第二章に入れてもよかったのではなからうか。

第六章では、海上交通と、陸上・河川交通を扱う。海上交通は特産品

の全国流通に焦点をあて、広域の流通の史料が収録している。志和領の飯米移出を統括した郡山藏宿の業務日誌（No.四一三）、悪銭の流通状況（No.四四〇）をはじめ、大豆が味噌の材料として、粕が木綿生産に不可欠なものとして東海地方に移出されていたこと（No.四四三・四四四）など、近年の流通史研究の動向を反映したものとなっている。また、陸上・河川交通では、伝馬制度や参勤交代のほか、領内の生産物移送で塩が主要街道を通らずに牛で移送されていたことなどが紹介されている。

第七章は、藩の宗教統制、民衆の信仰を扱う。とくに修験道関係が一つの特色となっている。京都の本山である聖護院に院号を請けに行く時の日記No.四九〇、博奕宿の場となつて処罰された例No.四八八、藩と祈禱寺や館神とされた神社との関係、寺院の仲裁機能、領外よりやつて来る宗教者、城下の祭祀、御用商人である京都の商人の取次によって山車人形が京都からもたらされたことなどがとりあげられている。なお、宗門人別帳は、檀家制度を示すという点では宗教にもなるうが、戸口という点で第二章に入れた方がわかりやすかつたようにも思う。

第八章は後期藩政をとりあげている。飢饉と財政難に対する政策を軸に宝暦以降・文政改革・改革後に分けて史料を収載し、さらに幕末の海防問題と北方問題に焦点をあてる。改革後については、島津家から九代藩主を迎えたことによる家格上昇の運動をとりあげている。文政改革については、第五章の産業や第六章の流通が藩専売と密接に関係しているので、前の章との関連を解説で示しておいた方が、読み手には親切だったのではないだろうか。

以上、紙幅と評者の能力から、個人的な関心による駆け足の紹介とな

つてしまつたが、最後に全体を通しての所感を述べたい。

本書の最大の特徴は、冒頭の巻のねらいで述べられる通り、藩領域を重視し、県域を越えて史料を収載したことであろう。たとえば幕府関係や、いわば江戸賄領ともいえる飛地の志和領、廻船関係の史料の収載は、こうした方針によって実現したと考えられる。

史料選定にあたっては、同時進行の『新編八戸市史』をはじめ、既存の自治体史や史料集との棲み分けが図られている。たとえば、家臣団の項で分限帳の掲載を避けたのは、既に八戸市が活字化をすすめているためである。No.二九・三七・五〇五は『新編八戸市史』と異なる年の冊を収録し、比較検討が可能である。また、読者はテーマ別の構成をとる本書から論点を学ぶことで、藩の日記類を編年体で編纂した既刊の『八戸藩史料』や『八戸市史 資料編』もより深く読むことができるだろう。

また、収録史料の配列は、藩政や家臣団と地方や商業・産業をうまく組み合わせながら配置しており、冒頭で述べられている藩政と社会を総合的にみるというねらいは十分に実現している。藩の御用商人西町屋の史料の活用も特筆されるであろう。このほか、テーマの中では、第三章の新田開発停止の要因に水源涵養林の伐採や草刈場の利用制限、第八章の大豆増産に伴う猪食害の拡大と飢饉、第五章の干鰯と沖合の漁業との対立、製鉄における砂鉄選別や炭薪生産に伴う森林伐採が環境や社会に与える影響など、環境史への意識が通底しているように感じられた。

ただし、疑問もないわけではない。近年、藩政史研究については、「藩社会」論や「藩世界」論が提唱されているが、評者自身は、江戸藩

邸を財政以外の局面でも組み込んでいくことが課題として残されていると考えている。この点で、他の自治体史と同様、本書でも江戸藩邸の掲載史料が、二代藩主の側衆就任に伴う屋敷拝領および財政における江戸での支出にかかわる数点の史料と、口絵の藩邸絵図一点に限られているのが気になった。

また本巻に限らないが、史料それぞれの解説が少ない印象を持った。各章冒頭の解説は質の高いものが多く、江戸藩領の概要を学ぶのにたいへん便利である。しかし、ほとんど解説が付されない史料もまみられる。自治体史の資料編では、一点一点に解説をつける方式、章ごとにまとめて解説する方式、その両方をとるものなど、さまざまな方法がとられている。さらに、『新編八戸市史』や『千葉県史』など、資料編の中に文書一点から読み解くコラムを付けるケースもある。せっかく掲載するのであれば、もう少し詳細な解説があった方がよいのではないだろうか。さらに、史料の保存・活用という点では、史料群の解説も付しているただけるとよかったように思う。また口絵や付図が、本文の解説では関連づけられていない。たとえば、とくに第四章に関連する付図の八戸城下の図、第五章の製鉄と口絵の遺跡発掘の写真、第六章に対応した船絵馬や一里塚など、読者に具体的なイメージを与え、史料の解説の助けになるものが収載されていたのに残念であった。古文書をどのようにすれば一般市民に関心をもっていただけのかという点は、博物館に勤める評者自身の課題でもあり、言うが易しであることは承知している。しかし、読者、とくに研究者以外の方への配慮は重要だろう。

青森県史の近世の資料編の刊行は、あと一冊を残すのみとなった。今

後、資料編を基礎とした通史編の叙述をすすめられるであろうが、ぜひ収録しきれなかった豊かな収集史料の活用も検討していただきたいと思う。公文書館の設置の検討なども含め、収集史料の保存と公開、古文書の公開講座や教育現場との連携など、さらに青森県史の活動が次のステージに展開することを望んでやまない。

(A4判、七九一頁、青森県、価格五八八〇円、二〇一一年三月刊)

(いわぶち・れいじ 国立歴史民俗博物館准教授)